



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「お陰さまカルマ ⑤」

少し横道に逸れたのでカルマの話に戻したい。

ミリンダ王と長老ナーガセーナの対話について前回紹介したが、盗人は有罪か無罪かの結論がでていない。世間の常識では盗みは有罪に決まっている。

王は問う。

「固定化されたものは存在することなく、仮の名前だけの存在なら、あなたを殺そうとも殺人罪は成立しないことになってしまいますぞ？ 長老さま」

長老は答える。

「殺人も盗人も有罪です。王よ」

前回の譬えなら、3分前の大魔王 a が盗んでも、3分後の大魔王 b は違う存在なので無罪である、とは言えない。確かに刻々変化しているが、一人の連続人間「大魔王」は存在している。故に ab でもある「大魔王」がその報いを受けなければならない。善悪の行為によってそれらの結果が現れる。

長老の別の譬えで、死後の大魔王と再生後の大魔王は別ものだという。だが生前の大魔王があるからこそ、死後の大魔王、再生の大魔王があることになる。

ちょっと待てよ。“死後”ということは、肉体が消滅しても死後の存在があるということなのか。それなら「大魔王」という固定化された、不滅なる大魔王（基体）を認めることになるのではないか。

長老さんよ。あなたは最初に「基体は存在しない」と言ったじゃないか。矛盾するぞ。

わが輩は人の行為について次のように説明している。

「人が行為をすると、その行為が原因となり結果を生じることになる。それを“業果”といい、潜在的印象、サンスカーラとして残存します。これを使い捨てカイロに譬えてみました。

ヒンドゥー教と仏教では主体（基体）についての考え方は異なります。主体は色形のない透明人間だと思ってください。

ヒンドゥー思想では、肉体が滅べば、使い捨てカイロ（業果）を貼ったままの透明人間になる。再生するとき容姿は異なりますが使い捨てカイロを貼ったままで生れる。つまり来世に継続することになります。ところが仏教では、主体を認めないので肉体が滅べば使い捨てカイロも消滅する。ですから、原因結果の法則の“今現在”を享受することが求められるのです」

長老と大魔王のどちらが偉いか。長老さんだ。さすればわが輩の説明は間違っていたことになるの

か。

わが輩が思うに、因果応報の法則（カルマ論）は不完全なのである。だからと言って、わが輩はその論を排斥しようとしているのではない。

カルマ論には、次の三つの作用があると考ええる。

- ①庶民のリクリエーション。
- ②宿業。過去世の行為が強調され差別につながる。
- ③未来の道徳性への誘導。本来の目的。

①庶民のリクリエーションについて実例を挙げてみよう。

わが輩が小学生のころ、わが家に向かって立ションする男らがいた。町の顔役とその用心棒である。塀ではなく家屋そのものに向かって立ションしていた。わが輩は憤慨して赤い鳥居マークと二枚の板に「大人の小便」、「みっともない」と赤絵具で書き、ご丁寧にもセメンダイン接着剤でコーティングした。わが輩の力作である。それなのに顔役は怒って「大人の小便」の上板をはぎ取った。しばらく「みっともない」だけは残ったが、それ以降立ションをしなくなった。

顔役が雇ういかかわしい酌女がときに半裸で掴み合いの喧嘩していた。けたたましい怒鳴り合いがよく聞こえてきた。隣家の大学生が何ごとかと窓から見ていると用心棒が怒鳴りあげた。そこで姉とわが輩は電気を消して覗き見ることにした。用心棒はそれを見破った。すぐに消灯することは覗きの証、子どもの浅知恵でそこまで頭が回らなかった。

「二階から見てるやろ！出てこい！」

小学生ながらビビることなく（？）階段を下りようとしたら、オフクロが「子どものことなので」と謝って治まった。だから顔役も用心棒もおもねる輩も大嫌いになった。

今から3年程前の夜、顔役が立ションしているのを見た。自邸の門の前だが、他人の家に向かって立ションしていた。

わが輩は呆れて呪いのことばを吐きかけた。

「ションベン地獄に墮ちろ！」

立ションベンという行為（原因）があるなら、いかなる“業果”（結果）が現れるのだろうか。

それから一年後に、その業果を知ることになった。ブッダ涅槃の聖地クシーナガルでのことである。夜の歓談会で、一年ほど前に特異な葬儀があった、と語り出した人がいた。それは誰かと訊ねたら、なんと顔役のことであった。わが輩は亡くなったことを全く知らなかった。愛妾宅で悶絶のうちに死んだと言う。どうしてそのような結末になったのか。全員が一斉に叫んだ。

「因果応報だ！」

それから、人の死が酒の肴になってしまった。

一代で財を築き豪邸に住み愛人を囲った。その力を恐れなびく人もいたが、嫉妬羨望嫌悪の庶民もいたであろう。

苦悶の死が因果応報なのか、わが輩は正しくは知らない。誰もそれを解明することは出来ない。ただただ庶民のリクリエーション（気晴らし、娯楽）になったことは、無情の極みとしか言えない。